

農村の一つの問題

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

「本間サマには及びもないが、せめてなりたや殿様に」という云い伝えがある。封建時代の殿様は、絶対権力者であったが、それ以上の存在であったというから、本間家の存在は際立って特異の地位を占めていたものであろう。

本間家は、大地主の代表的存在ではあったが、その形成過程は、必ずしも、農耕そのものではなく、肥料を貸し、その担保に、耕地を抵当に貰うというような、作付け以外で身代を大きくしていった要素がたぶんにあったようである。その意味で、農地解放後の本間家の復興を知りたいものと思う。

政府としてもこんにちまで全力を傾倒しながら農村の繁栄をはかっているけれども、期待する効果は挙がっていない。それはなぜかという、基本的に、農村に知識が普及していないからであると思う。

筆者の如く、明治の末期に生まれ、大正・昭和の時代に育った者に、いちばん困った考えは、「百姓に学問は要らない」という思想であった。農村に生れたからと云って、必ずしも皆が農民になるわけではないのに、この思想が支配的で、農家に生れた子等は、どれほど悩まされたかしのれない。かくして、あたり有為の人材が、農耕の間に埋もれていったものである。

昔は、階級制度だから、士農工商と類別さ

れ、農は昔からの作業を守っていればコト足りたが、こんにちでは、農家もまた工業の技術をマスターしなければ、機械を操作することも出来ず、商業的知識を持たないと、市場の取引に遅れをとる。時々刻々にかわる市場相場は、新聞はもちろん、テレビ・ラジオで全国に普及している。

岡山県の干拓地につくられた農場には、飛行機の滑走路が設備され、京・大阪に出荷される野菜は、この滑走路を利用している。

昨年7月1日、生れ故郷の農村で、公民館が古くなって、建て替えに困っているというので、新築して寄贈した。その竣工式に出席して、23回にわたって視察してきた海外の大規模農業の現状を説明したら、出席した婦人たちが、「もっと話してくれ」という。断ったら、あらためて講演に来てくれと人を介して依頼してきた。専門家でもないのに、調子に乗ると失敗するからと辞退をしたが、もっと門戸を解放し、広く知識を吸収する必要のあることは明々白々の事柄である。

そういう意味からは、農協のような存在も、組織と活動に一考を加えることが必要であろうと思う。然し、他から示唆されて動いたのでは、成功は覚束かない。農村が自発的に、農民が自動的に自覚し、知識を吸収し、日常の業務に活用して、それを一村に及ぼし、地域に浸透して欲しいと思う。